自由学校 遊（ユウ）

2017
10月

ゆうひろば

北大から返還された遺骨を供養するカムイノミ・イチャルパ（先祖供養の儀式）
2017年9月17日、紋別市にて

特集 もっと、北海道を！

ドラえもんへ ・・・2
講座「北海道150年をみつめ直す」に参加させていただいて ・・・4
死者を弔う ・・・6
民族象徴空間設置に関わっている所から考えること ・・・7
開道150年？ ・・・8
二つの講座を受けて…いくつかのつぶやき ・・・9

企画報告　四国も始動！ＳＤＧｓローカルアジェンダづくり ・・・・ 10
企画報告　前川喜平さん講演会 ・・・・ 12
講座報告　北村公一先生講座を振り返る ・・・・ 13
寄稿　井上芳保著『犠牲になる少女たち』を読み、ワクチン行政の闇を考える ・・・・ 14
連載　東さんのボロボロ日記　（第94回） ・・・・ 16
連載　フィールドワークな日々（第70回） ・・・・ 17
連載　気ままに俳句（第１３回） ・・・・ 18
事務局便り など ・・・・ 19

遊通信
第164号

特集　もっと、北海道を！

千歳空港に降り立ち、JRで札幌に向かい新札幌に近づくころ旅客の目に入るのは「百年記念塔」。1968年の「開道100年」のシンボルとして1970年に竣工。その頃の「北海道地図」を開くと、「国鉄」や「私鉄」の線路がそれこそ網の目のように縦横無尽に張り巡らされている。それがこの50年たった今、僅かに「本線」と呼ばれていた路線を残すだけになっている。建てるにさいし賛否交々だった「記念塔」も今は「危険につき立ち入り禁止」。来年の「北海道命名150年」を機に撤去なんてこともあるのか。前期に設けられた「北海道をもっと知ろう！アイヌ入門講座」と「北海道150年をみつめ直す」の二つの講座の講師や受講者の皆さんにご寄稿いただき特集としました。

ドラえもんへ

山田 伸一

八月四日に「遊」の講座「北海道一五〇年をみつめ直す」の第三回で「北海道の近代史を見る視点」と話した二日後、朝日新聞の「もっと教えて！ドラえもん」という欄に「「北海道」の名前はどこから？」という記事が載りました。ドラえもんが「北海道」の名前の由来を、その「名付け親」とされる松浦武四郎との関連から説明するこの文章に強い違和感があり、新聞社宛てに送ったのがこの文章です。残念ながらドラえもんからの返事は受け取っていません。

アイヌ民族の理解者としての武四郎を盾にして、「北海道」命名の本質的な意味を誤魔化そうとする動きに、どう対抗するか、と考えます。

子どもの頃から知っていたけれど、手紙を書くことがあるとは思ってもみませんでした。

八月六日の朝日新聞朝刊に載った「もっと教えて！ドラえもん」を読んで、これはないだろう、と強い疑問を抱きました。親切に教えてくれるドラえもんは、私の疑問にも耳を傾けてくれるだろうと思って、手紙を書くことにします。

右側半分の、ドラえもんが説明している文章について です。うまく整理できませんが、私の疑問を三つに分けて以下記してみます。

一つは、松浦武四郎の「北加伊道」と、実際に命名された「北海道」は別物、切れているのではないか、ということ。

ドラえもんが書いている、武四郎がこういう意味を込めたという話は、「北加伊道」という案について言えること。でも、それを含む武四郎の六つの案をもとにして、新政府が決定したのは「北海道」でした。「北加伊道」ではないという点は、軽い問題ではありません。なぜ「北海道」としたのか、新政府は何も説明していないけれど、「北加伊道」に武四郎が込めた思いをくみとったからだとはとても思えません。それは、朝日新聞社とHTBの「北海道重大ニュース」から、明治政府がその後アイヌ民族に対して何をしたのかを拾い読んでも容易に想像できることです。

「「北加伊道」がもとになって「北海道」と決まったのは」というドラえもんの言い方は、決定までの過程や「誰が決めたか」を曖昧にしていて、よくないとも思います。

二つめの疑問は、一つめの疑問とも深く関連

することです。

ドラえもんは「蝦夷地」の名前を変えて「北海道」とした、と説明しています。でも、これは事柄の一面だけしか見ていないですね。新政府がしようとしたのは、単なる改名ではなく、蝦夷地に道名を付けることだったはずです。同時期の国郡の設定・命名とも密接に関連し、道を設定し、命名するという行為。

道名を付けるとは、つまり、蝦夷地を、本州・四国・九州にすでにあった五畿七道の枠に新たに収めること。ドラえもんが「北海道」の部分しか見せないで説明をしているのは、まずいです。厳しい言い方だけど、ドラえもんの説明では、事の本質を覆い隠してしまっていると思います。

五畿七道を視野に入れて、「北海道」を見つめたらどう見えるでしょうか？七道は、東山道、北陸道、東海道、山陰道、山陽道、南海道、西海道。ここに並べたときに違和感もなくとてもしっくりするというのが、新政府が「北海道」を採用する際の重要なポイントだったのでしょう。

研究者によれば、武四郎が新道名案を提案するように求められるより前から、新しい道名として「北海道」を推す声は強くあったそうです。

新政府の幹部たちは、武四郎の六つの案を参考としつつも、すでにあった七つの道名との調和を強く意識して「北海道」と決めた。私はそう理解しています。武四郎の「北加伊道」案を採用したのではなく、それを退けて「北海道」とした、と言った方が正確なのかもしれません。そのことによって、いわば、アイヌの大地を明確に日本の版図に組み込んだということです。花崎皋平さんが「北加伊道が北海道に変えられたとき、そこにこめられた大事な意味も消された」（『静かな大地　松浦武四郎とアイヌ民族』岩波書店、一九八八年、一〇頁）と書いているのに、私は賛成です。そうではない、武四郎が「北加伊道」に込めた思いが「北海道」に引き継がれたのだ、とドラえもんが言うのなら、ぜひその根拠を教えてほしいと思います。

三つめの疑問は、私のこの手紙を読むのは誰なのかということです。ドラえもんが読んでくれるなら嬉しいのですが、残念ながらそう思うことはできません。自分が理解した歴史像を書き綴った文章を、われらが親愛なるドラえもんの言葉として発信しているあなたは誰ですか？

この記事を見たとき、広告かと思いました。でも、そうではないのですね。何でも知っているドラえもんの発言の形をとって、特定の歴史の見方を報道機関が一方的に発信する。これは責任ある報道機関の姿勢として許されるものではないと思います。最低でも実際の執筆者名を明記すべきではないでしょうか？

「北海道一五〇年」に関連した朝日新聞社の企画として、「あなたと選ぶ北海道重大ニュース」の欄は、興味深く眺めています。多様な問題への広い目配りには、教えられることが多いと感じています。「北海道一五〇年」のようなキャンペーンの旗振りや実践に報道機関が関わることに私は引っかかりを持っていますが、こうした連載を企画するという形ならば悪くないのかもしれない、とも考えるようになってきました。

それだけに余計、今回のドラえもんには残念だという思いが強くします。

二〇一七年八月七日

追伸

この手紙、ドラえもん宛てなので、野比家に送るべきなのでしょうが、あいにく住所を知りません。やむをえず、発行者として記載がある朝日新聞北海道支社に送ることにします。

最初、ドラえもんを思い浮かべて書きましたが、それではあまりに馴れ馴れしい文章ととられるかと思い、文末を中心に修正しました。

山田 伸一（やまだ しんいち）
「北海道百年」が騒がれていた頃、一九六八年、秋田市生まれ。一九九二年に札幌へ。現在は江別市に住む。北海道博物館に学芸員として勤務。

特集

講座「北海道150年をみつめ直す」に参加させていただいて

岩間 暁子

「日本社会とアイヌ民族―アイヌの歩みから『民族』を考える」をテーマとする3泊4日のスタディ・ツアーの一環として、第3回「北海道の近代史を見る視点」（8月4日）および翌日に開催された「番外編　北海道博物館見学」の二つの講座に参加させていただきました。

「格差・不平等の社会学」をテーマとするわたしのゼミでは、日本社会における社会階層、ジェンダー、民族・国籍による不平等の問題について、歴史や国際比較に基づいて批判的に考えるとともに、多様な背景を持つ人々を包摂できる社会の構想を目指しています。ゼミを母体としつつ、より自由に、より主体的に学生が学べる機会を提供できれば、という思いが今回のスタディ・ツアーの出発点でした。また、わたし自身が就職で北海道を離れてから痛感した「国内植民地」としての性格をもつ北海道を訪れて学ぶ経験は、首都圏で生まれ育った学生たちにとっても貴重な経験になるのではないか、という思いもありました。

北海道を訪れる前に東京駅近くのアイヌ文化交流センターでセミナーを開催していただいたほか、アイヌ民族や沖縄の人々の近代以降の歩みを取り上げた複数の文献を読み、議論する読書会も開催しました。今回のツアーでは、北海道大学附属北方民族資料室、北海道アイヌ協会、アイヌ民族博物館（白老）なども訪問しました。

格安航空券とゲストハウスを利用した節約ツアーには4名の学生が参加しましたが（日程の都合がつかず、事前学習のみに参加した学生も他に3名いました）、たくさんのことを感じ、学んだようです。さっぽろ自由学校「遊」のみなさん、講師の山田伸一さんには大変お世話になりましたこと、深く感謝申し上げます。以下は参加学生の感想です。

▽北海道は2018年に「命名150年」記念の年を迎えるが、スタディ・ツアーでは、この「記念」という言葉を再考する必要があることを学んだ。ある日本語の辞書によると、記念は「過去の出来事・人物などを思い起こし、心を新たにすること」を意味する。実際に行われる記念祭の類も、この定義から大きく外れることはそう多くないように思える。また、日本各地で伝統芸能や民族衣装に触れたり、歴史上の人物や事物を振り返るイベントが開催されている。しかし、「祭り」の色合いが強くなれば、それに反比例するように歴史の「負の側面」に向けられる眼差しは失われていく。一方で、祭事的なイベントとして定着しなければ、注目が集まらない面があるのも事実である。催しに参加する際には、それが過去をありのまま振り返るものなのかを常に問う姿勢が求められると感じた。

（社会学部社会学科3年　粕谷健斗）

▽この夏、私は初めて北海道を訪れた。「アイヌ民族」「アイヌ文化」という言葉はよく耳にするものの、「実際のところ、自分はほとんど知らないな」と思ったことが参加のきっかけとなった。二つの講座を受講し、明治時代にアイヌ民族が官営工場で働かされていたなどのアイヌ民族の歴史に限らず、ハンセン病患者の隔離政策など、北海道の歴史についても知らないことばかりだったことに気づかされた。また、山田さんに解説を加えていただきながら北海道博物館を見学できたことは、とても大きな収穫だった。専門家ならではの文化に関する論争や博物館改装時の裏話などをうかがい、展示物を一人で見るだけではわからないことを学ぶことができた。

（社会学部社会学科3年　倉金ゆみ）

▽北海道を初めて訪れたわたしは、二つの講座やスタディ・ツアー全体を通して、北海道を「観光地」の側面だけでなく、多面的に見ることができた。山田さんの講座では、山田さんの努力の結晶である膨大なデータとともに、「北海道命名150年」をめぐる現段階での混乱やその背景が解説された。そこから、札幌と函館の官営事業で働かされたアイヌ民族が、これまでと生活を異にする土地において感じたと思われる戸惑いや、アイヌ民族ではない人々との交流がどのようなものであったかなどを考えさせられた。北海道博物館見学では、山田さんならではのトークや「裏話」が展開されたが、初めて触れる貴重な内容だった。「北海道」の語られ方や「アイヌ民族」が翻弄された歴史、展示されていた北千島アイヌと樺太アイヌの二つの写真に示されているように、アイヌ民族内の多様性を確認できた有意義な時間だった。

（社会学部社会学科3年　益子亜明）

▽わたしは、山田さんが講座のなかで紹介してくださった歴史的資料の一つ一つに目が釘付けになった。それらは、わたしたち一人一人に北海道の歴史を考えるきっかけを与えてくれるものであり、そこからわたしが知らなかった北海道の姿をみることができた。たとえば、「北海道100周年」当時の新聞からは、その頃の人々が開拓の歴史を礼賛していたこと、アイヌ民族に対する配慮が欠落していたことなどがうかがい知れた。また、1800年代の札幌・函館の製革所でアイヌの若者たちが働かされていた事実を示す文書からは、被差別の問題だけではなく、過酷な状況下でもたくましく生きるアイヌの若者たちの姿が浮かび上がった。これまでのわたしにとって、歴史とは教科書や書籍に記されていることをおぼえるだけのものだった、と痛感させられる貴重な体験となった。これからは自分の目と頭を使って歴史に向き合っていきたい。

（大学院社会学研究科博士課程前期課程1年　向山夏奈）

↑北海道博物館にて（2017年8月5日、中央が山田伸一さん）

岩間 暁子（いわまあきこ）
立教大学社会学部教員。北海道出身。主著に『女性の就業と家族のゆくえ―格差社会のなかの変容』『マイノリティとは何か―概念と政策の比較社会学』。

特集

死者を弔う

殿平 善彦

北海道の自然は素晴らしい。人情も厚い。この地に生まれたことをうれしいと思う。しかし、近代史を学ぶと、北海道の闇が見えてくる。日本の植民地として先住民アイヌに苦難を強い、囚人労働、「タコ」部屋労働、戦時下の朝鮮人、中国人強制労働で多くの犠牲者を出した。

私の生まれた地から60キロメートル離れた山中、朱鞠内では、ダム建設と鉄道工事があり、戦時下の6年あまりの工事期間に240人もの日本人、朝鮮人が死亡した。死者の多くは共同墓地の裏に埋められ忘れ去られようとしていた。1980年に地元住民と民衆史掘り起し運動が協力して発掘が始まった。1997年には韓国人、在日韓国朝鮮人とアイヌ、日本の若者たちが共同で遺骨発掘を取り組んだ。遺骨が次々と地上に導き出される。

土中から掘り出された遺骨は白骨とは言えない。赤黒く、朽ちようとする頭蓋骨の大きな眼窩には木の根が纏わりつく。労働を強制され、死を無視されて埋められた人たち。彼らは死んだのだろうか。人は生理的に死を迎えるが、それだけを死と定義することはできない。死はその死を見送るものと見送られるものとの関係の中で成り立つのであって、葬儀は死を確定するために欠かせない通過儀礼だ。彼らにはおそらく葬儀などなかっただろう。あったとしてもごく簡素な、ありきたりのものであり、死そのものが強制された死であった。そんな彼らは死んでいない。涙一つ流されることなく、物体として埋められた彼らは死にきれない。死が中断されたまま、地下に埋められた人たち。半世紀の後、東アジアの若者たちはその人を発掘した。今更であっても追悼は丁寧に行われた。死者本人の宗教がなんであったかはわからないが、発掘した人々は自らの宗教や信条に従って祈った。仏教、キリスト教、儒教、伝統的シャマニズム、アイヌはアイヌプリ（アイヌのやり方）で祈った。無神論者の時間も設けられた。

私たちが道内で発掘し、あるいは発見した朝鮮半島出身の遺骨115体が2015年9月、韓国の墓地に収められた。ソウルの市庁前広場で行われた葬儀には千人を越える参列者があり、韓国の7大宗教の祈りもささげられた。その結果、死者が慰められたかどうか、わからない。

昨年、朱鞠内の発掘現場に日本と朝鮮の死者240人余りの名前を刻んだ銘板を設置した。私たちにできることは、過去の死者たちを忘れないこと、可能な限り追悼し、犠牲を再び生まないと誓うことだ。しかし、それすらもおぼつかないかもしれない。死者はなお残り続けるだろう。彼らを北海道の大地にゆだね、自然が彼らを包むことが最後の慰めなのだろうか。

殿平 善彦（とのひら よしひこ）
1945年生まれ。浄土真宗本願寺派一乗寺住職。1970年代から「タコ」部屋労働、朝鮮人強制労働犠牲者の遺骨発掘に取り組む。東アジアの若者たちの交流の集まり「東アジア共同ワークショップ」を主宰。

オーガニック・自然食品専門店
有機やさいと加工品！
配達もやってます！
らるばたけ
札幌市中央区大通西23丁目
tel 614-2406 Fax 614-3836
http://rarubatake.com
AM10時～PM7時（日曜PM5時）

特集

民族共生象徴空間設置に関わっている所から考えること

八幡 巴絵

8月30日（土）、私は北海道庁で象徴空間開設1000日前記念のセレモニーに参加しました。セレモニーがお開きになったあと、「あと1000日しかないのか」と思いました。

民族共生象徴空間では、アイヌ文化復興の「広義のアイヌ文化復興」の拠点、そしてアイヌの歴史、文化等に関する国民の理解の促進として整備するために、現在も関係各所において検討が行われています。

白老町は象徴空間の整備に伴い、新しく飲食店が出店したり、勉強会や商品開発などの事業が加速しています。北海道も、象徴空間PRなどに力をいれ、アイヌ文化発信に力が入っているなと実感する機会が増えました。ほとんどの事業に博物館として関わっていて感じますが、1000日を過ぎたころから、一気に加速したと感じています。

そのなかで私が象徴空間に望むこと。それは、アイヌが昔どのように暮らしていたかを学ぶ環境を整えてもらうことと、現代に生きるアイヌとしてどのように生きていくかをアイヌ自身が考えられる空間にしたいということです。文化は、人が作り出すもの。人の五感をめいいっぱい活用した知恵や技術の集大成です。今は、記録や映像だけは比較的入手しやすいのですが、まだまだ学習環境は少ないと感じています。

私を含む若手は、昔ながらの空間のなかで育っていない人がほとんどです。私の家系におけるアイヌプリ（伝統的な様式）での暮らし方は、曾祖父・祖母の時代で途切れていました。そのため、伝承活動を行い、学習していくなかで「アイヌ文化を取り戻さなければ」という考えに突き動かされていきました。アイヌとしてのルーツと経験値のバランスをとりたい一心で伝承活動に携わっていたのです。

これまでの活動で、「アイヌとして自分は何をしたいのか、何を子どもたちに残していきたいのか」という考えに常に向き合い、アイヌがいきいきと暮らせる社会を作りたいと思うようになりました。

この原稿を書いている今は、「開設まで911日」の表示が見えています。今、白老では徐々に工事が進み、象徴空間へ動きだしたなと目で実感できるようになってきています。国立アイヌ民族博物館予定地の杭抜き、駐車場予定地の整備が行われています。象徴空間開設がゴール地点ではなく、スタートであることを忘れず、引き続き頑張って各種検討を行いたいと思います。

象徴空間開設に向けた工事の様子

八幡　巴絵（やはた　ともえ）
一般財団法人アイヌ民族博物館学芸係長。1983年北海道白老町生まれ。苫小牧駒澤大学卒業後、2006年よりアイヌ民族博物館に勤務。アイヌ文化伝承活動や白老町内のアイヌ文化学習を担当。

特集

開道150年？

原田 公久枝

「お～い お～い 北海道♪ 北海道～♪ 親父の親父がひらいた土地だよ～♪ 北海道～♪」という歌を知ってますか？ 開拓民の苦労もわからないではないですが、その前からずーっとアイヌが住んでいたんですけど？

開道150年と言って盛り上がっているみたいで北海道の名付け親だと松浦武四郎を担ぎ上げているのも（うーん…）と思ってしまうのです。武四郎さんは好きですし悪いことではないと思いますが、アイヌは別にひらいて下さいなんて言ってなかったと思うんです。ロシアに「無主の地」である蝦夷地を取られるのが惜しかった日本が「ロシア人より先に！」っておっかなびっくり蝦夷地に渡って来た時、私の祖先であるアイヌ達は何も知らない可哀想な和人にとても親切にしました。日本風の家の造りでは寒いから土を掘って造った方が良いよーとか、えものが沢山とれたから食べなーとか、和人が捨てて行った赤ん坊も育てました。

それなのに和人は自分が多数者になるとアイヌを馬鹿にして下に見て差別して、しまいには帝国大学やら外国から来た偉いと言われる研究者やらに、わざわざアイヌの墓を盗掘して骨をプレゼントしてやって…。そんな骨が先日ドイツから返されて北大にある「アイヌ納骨堂」と書かれた「標本庫」にしまわれたようです。

ここでアイヌじゃない人に質問します。あなたの先祖代々の墓があばかれて骨を勝手に持って行かれました。百何年後かに「返してやるわ―」って言ってペッて返されました。その時あなたは「曾祖父の時代の古いことだし、ま、いいわ」と思うでしょうか？

もう一つ質問します。あなたは大阪に住んでいて曾祖父の骨もそこから持って行かれましたが返す方の例えばベルリン博物館から「東京までしか返せないし、昔のことなんで、今の私達には関係ないんで、謝りませんからー」って言われました。「まあ、東京まで送ってくれたんだから、ありがたい」と思うでしょうか？

私は長らく、遺骨なんて別にどうでもいいやという考えでした。人間、死んじまったらそれでお終い、骨なんてどうでもと思っていました。しかしこれはアイヌの尊厳の話なんだと気づきました。

さて、ドイツから返された遺骨は、コトニコタンのシトレンテさんというアイヌだと言われています。そしてそのコトニコタンは現在の北海道大学の実験苗畑そばのテニスコートの辺りだとわかっています。それは2017年8月に加藤好男さんが出版した『19世紀後半のサッポロ・イシカリのアイヌ民族』に書いてあります。せっかく北大にまで帰って来たなら、「標本庫」にではなく、コタンにシトレンテさんを帰してあげたいものだと思うのです。返すものは返してキチンと謝った時、シサム（和人）でも、フレシサム（外国人）でも、アイヌネノアンアイヌ（人間らしい人間）になると私は考えます。

原田 公久枝（はらだ きくえ）
１９６７年生まれ。河西郡芽室町出身札幌在住。新聞配達をしてその集金をしながらフンペシスターズの一員として活動して雑誌などに文章を書いています

特集

二つの講座を受けて…いくつかのつぶやき

浜崎 じゅん

〔痛みのペンリウク〕

はるか遠く時空を超えた彼方からペンリウクさんが私の耳元で話しかけてくださっているかのような叙事詩の言葉のひとつひとつが、著者・土橋さんのお話とともに胸の奥まで響いてくる。

〔白老 ポロト湖〕

白老アイヌ民族博物館を今年の春に友人達と訪ねた時、夕刻近いポロト湖のほとりは穏やかで静かな時間が流れていた。湖の向こう側に何やら大きなものが作られる計画に、今のこの心地よさは失われるのかなとふとさみしい気持ちになった。

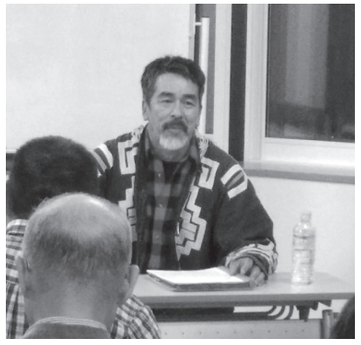
アイヌ民族の方々の望む意向が最大限に検討されて取り入れられているのか、研究という名目のもとに真の謝罪もなされずにこれまで続いている遺骨の問題に何の反省もなく慰霊の場に集約することは誰が求めていることなのか、私の中でも疑問は多い。

八幡さんから、現在の博物館側でも希望する理念などが話し合われていることを伺い、永く未来へ繋がる存在として新しい博物館にきちんと受け止めてもらうべきと強く要求したい。

〔結城庄司さん〕

結城幸司さんのお話を伺って、お父様の結城庄司さんがこの大地の上で起こる差別・人権侵害と闘いながら熱く深く思い描かれた北海道の姿・あり方に近づいているのだろうかと考えてみるとなんだか心苦しくなってしまう。

かつて結城庄司さんがお仲間や支援の方々と飲み語らっていらしたという狸小路のお店にタイムスリップしてテーブルの端っこでその場面にこっそり加わってみたい。「遊」に関わっておられる方の中にも結城庄司さんの活動のそばにいらした方が少なくない。私も本当にお会いしたかった…と改めて思う。


結城幸司さん

〔北海道命名150年〕

松浦武四郎の北海道命名に係り、北海道の150年事業担当の方も1回目の講座にみえて挨拶されていた。北海道100年の際の〝批判〟のようなことが起きないようになどと目の前のあれこれに対応するのではなく、この機会に真摯に北海道150年を考えて〝開拓〟前夜からアイヌ民族の方々へなされた数々の政策～大地を奪い、強制移住、狩猟・鮭漁の禁止・アイヌ語や文化の剥奪等々～を振り返り、命に関わる苦しい状況に追いつめたことを認めて表明してほしい。そうして北海道150年をただ記念の通過点として祝うだけで済ますことなんかできないと広く道民・市民も知るべきではないか。このためにもその北海道の担当の方には続く北海道150年の講座の2回目以降も必ずや受講してほしかったがみえていらしたのかどうか…。

（註・その後の受講はなかった）

浜崎じゅん（はまざき じゅん）
1歳の夏に札幌でポリオに罹り松葉杖や車イスを使用。詩を読むのが好き。年に数回 車イス・ショートレースに参加して激走!? 会社員。

企画報告

四国も始動！ＳＤＧｓローカルアジェンダづくり

大崎 美佳

「ゆうひろば」をご覧の皆さんは何度か目にされている、さっぽろ自由学校「遊」が主導してきたＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）の北海道版ローカルアジェンダづくり。四国でも動いています。ここでは、9月23日（土）～22日（日）愛媛県内子町で開催された「私たちが目指す地域づくり～四国版ローカルＳＤＧｓをつくろう～」（主催：国連生物多様性の10年市民ネットワーク四国地域グループ、内子町）の参加報告をします。

美しい街並みが保存されている内子町

「四国でのＳＤＧｓの事例を伺ってみよう」と平成29年3月に愛媛県内子町在住の堀江由美子さん（セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン）を北海道にお招きしたことがこの物語の始まり（ＥＳＤ学び合いフォーラム［主催：ＮＰＯ法人さっぽろ自由学校「遊」、ＥＰＯ北海道］）。堀江さんから「地域づくりの一つに四国でもＳＤＧｓローカルアジェンダをつくりたい」と、こちらもご協力できる部分があると思いますと意見交換させいただきました（居酒屋でというのは内緒（笑））。

1泊2日のワークショップは、エクスカーション、事例紹介、ローカルアジェンダづくりと盛りだくさんの内容でした。エクスカーションでは、内子町のまちづくりの理解を深めるために、「内子フレッシュパークからり」、「石畳地区（石畳清流園、弓削神社、炭焼きの現場）」を訪問。石畳地区の水車を復活させる取り組みが印象的でした。補助金等には一切頼らず、自分たちの資金、周りにある資材を使って水車を復活させてきています。森や川と調和している姿に感動を覚えました。

住民の手で復活させた水車

その後、内子町、四国、四国外と様々な地域から参加者が集まり、約35名でワークショップを開始しました。ＳＤＧｓの策定経緯や地域が取り組む意義、内子町の地域づくりとして行政、市民社会、高校から事例発表がありました。北海道から、次期計画を策定中の札幌市環境基本計画にＳＤＧｓを位置づける等の動きをみせる札幌市、ローカルアジェンダづくりをしてきたさっぽろ自由学校「遊」、ＳＤＧｓに関係する学びの場を開催してきたＥＰＯ北海道が参加し、それぞれの立場から取り組みや課題をお話させていただきました。同じ島国である四国と北海道がコラボする嬉しい瞬間でした。

様々なインプットを得て、ワークショップへ。主催者が事前に用意した四国の課題を参加者がＳＤＧｓのどのゴールと関連があるのか議論しながら並べました。それを元にＳＤＧｓのゴールごとに四国の目標を考えました。もうひとつ、ある目標にいくためにこの手段を順に踏んではどうかという流れを一つの木にして考えてみる手法も実施されました。

自分が住んでいない地域の課題や取り組みを考えることは難しさを感じましたが、北海道と共通することがあったり、北海道ではどうだろうと改めて考えることがあったりしました。まずは立ち止まって自分たちの地域、鳥の目で都道府県、日本と考えてみることはＥＳＤの取り組みになると実感をしました。貴重な機会をいただき、心より感謝します。

ローカルアジェンダづくりワークショップの様子

大崎 美佳（おおさき みか）
環境省北海道環境パートナーシップオフィス（ＥＰＯ北海道）スタッフ。自然の中にいることが好き、台湾の人柄や食べ物が好き。

生活クラブは、
ちょっと変わった
生協です♪
モットーは
「おいしくてカラダによくて
自然を壊さない」です
生活クラブ北海道　検索

予告

ＮＰＯと持続可能な開発目標（ＳＤＧｓ）に関する学習会＠札幌

「誰ひとり、取り残さない」 SDGsと北海道、そして市民社会

■日　時　2017年11月20日（月）　13:30～17:00
　　第一部　13:30～14:50　第二部　15:00～17:00
■会　場　札幌市教育文化会館　403研修室（定員80名）　※参加費無料
■ゲスト　根本かおるさん（国連広報センター所長）、今田克司さん（ＳＤＧｓ市民社会ネットワーク）、政府関係者（予定）　ほか
主催（共催）：一般社団法人SDGs市民社会ネットワーク、超党派ＮＰＯ議員連盟
　　北海道ＮＰＯサポートセンター、ＮＰＯ法人さっぽろ自由学校「遊」
＊詳細につきましては、「遊」事務局までお問い合わせください。

企画報告

「ないがしろにされている憲法の理想 教育で実現を」

前川喜平・前文科事務次官が札幌講演

長谷川 綾

さっぽろ自由学校「遊」と、日本ジャーナリスト会議北海道支部は衆院選翌日の10月23日夜、前文部科学事務次官、前川喜平氏（62）を招いた講演会「挑戦―前川喜平が語る教育」を札幌市北区の札幌エルプラザで3時間半開いた。780人が来場。前川氏は、安倍晋三首相の友人が理事長を務める加計学園の獣医学部新設計画に政権が便宜を図った疑惑について「公正公平であるべき行政が歪められ、国家権力の私物化が疑われる。闇から闇へ葬ったら、国民の知る権利をベースにする民主主義が危ない」と指摘。安倍政権に対し、個人の尊厳や平和主義、立憲主義など「憲法の原則をあちこちでないがしろにしている」と痛烈に批判した。

前川氏は教育のあり方を、憲法の視点から取り上げた。旧・教育基本法（1947年制定）前文の冒頭「われらは、さきに、日本国憲法を確定し、民主的で文化的な国家を建設して、世界の平和と人類の福祉に貢献しようとする決意を示した。この理想の実現は、根本において教育の力にまつべきものである」を紹介。「憲法の理想は、教育の力で実現する必要があるということだ。憲法が一番大事にしている価値は、13条の個人の尊厳だと思う。一人一人がかけがえのない存在で、違いが認められ、自由、自律的な生き方が尊重されなければいけない」と述べた。

だが、現行憲法の理念と相いれないと戦後国会で確認決議もされた教育勅語に対し、評価する政治家が増えたことに「反憲法的行為だ。個人より国家を重んじる、戦前の国体思想の考え方が今にもつながっている」と強く懸念。道徳教育については「政治の力によって徳目を注入させられ、内心の自由に踏み込む危険性がある」と明言した。文科省は来年度（2018年度）から小学校で、再来年度（19年度）から中学校で、「道徳」を検定教科書使用の「特別な教科」に格上げする。前川氏は初等中等教育局長だった14年、下村博文文科相の下で作った「国定」の教材「私たちの道徳」について「責任がある」と認めた上で、「担当課に一つだけ注文したのは『自由の価値をきちんと書く』だったが、『自由には責任を伴う』などと書かれた。『よりよい校風を作ろう』『郷土、国を愛そう』など集団主義的な価値も強調されている」と問題視した。

前川氏はさらに、14年の集団的自衛権行使を認める憲法9条の解釈変更、15年成立の安全保障関連法について「戦争の違法化という人類が勝ち取った憲法9条を掲げているのに、理想を持たない現実主義だ」と批判した。70分の講演後、第二部で干場信司・前酪農学園大学長、往住嘉文・北海道新聞編集委員と討論。審議官だった15年9月18日、安保関連法が参院で成立する直前に国会前で学生団体「SEALDs（シールズ）」などが行う反対集会に参加したことも明かした。

講演は、衆院選で自民、公明両党が改憲発議に必要な3分の2超の313議席を得た大勝の翌日。「安倍一強」に不利な証言を続ける前川氏への関心は高く、本会場のほか、ネット中継でつないだ第二、第三会場も立ち見で超満員に。「勇気をもらった」と名寄から祝電も届いた。会場設営や警備には市民、北大生ら約50人のボランティアが協力した。全国大学高専教職員組合北海道地区協議会、北海道平和運動フォーラムなど6団体が協賛し、北海道新聞社、毎日新聞北海道支社、朝日新聞北海道支社の3紙が後援した。

長谷川 綾（はせがわ あや）　新聞記者

講座報告

北村公一 先生講座（2015～2017）を振り返る

笹木 陽一

北村先生との出会いは今からちょうど十年前、私が札幌市教職員組合の全市教育研究集会に初めて参加した時（2007年9月）に遡ります。当時の私はその前年に改悪された教育基本法に対峙し、いかにしてこどもの側に立った教育や学校を守るのか孤軍奮闘していました。武満徹、高橋悠治、林光、茨木のり子、森有正、E．サイードなどを参照する深い知性に圧倒され、勤務校から外に出て学ぶ必要を強く印象づけて下さったのが、他ならぬ北村先生でした。先生の推薦で全道教研の正会員となり、翌年には全国教研にレポートを提出すると共に、札幌の音楽委員長を引き継ぎました。当方が立ち上げた音楽教育のメーリングリストや「こどもの姿を語る会」に参加して下さり、「音楽教育の会」の学習会や3・11チャリティイベントなどを一緒に開催するなど、その後も様々な場面で共に学ばせて頂きました。

先生は退職を迎えた2013年、『遊』の正会員となる事で、新たに学びのフィールドを広げます。2015年の前期からは、5期にわたって連続講座の講師を務め、小学校教員としての実践に支えられた豊かな教養を、惜しげなく披露して下さいました。以下、講座のタイトルのみ紹介します。

〈2015年〉

①戦前から戦後の教育を考える
（明治から敗戦までの教育～花ひらく民主教育～教育の変遷～今後の課題と展望）

②現在の教科書から見えてくるもの
（「私たち道徳」から道徳教育について～社会科の教科書から～算数、数学における「問題解決学習」の現在～言語の教育から日本語、英語教育について～保健の教科書から性教育について）

〈2016年〉

③二つの憲法とその歩み
（明治憲法制定過程～明治憲法とその後のあゆみ～大日本帝国憲法崩壊から日本国憲法誕生～日本国憲法その後のあゆみ）

④現在の「教育改革」を展望する
（教育基本法は、どのように変えられたか～「チームとしての学校」とは何か～高校、大学の改革と「高大接続」で どのように変わるか～「アクティブラーニング」とICT教育～「美しい国」「日本会議」とは何か）

〈2017年〉

⑤「近代家族」から「現代家族」の諸相
（憲法24条と女性の権利～北村達著「近代家族」を読む～家族論再考～「結婚・性・家族」について現状と課題～話し合い）

憲法学者の久田栄正氏から教育基本法を学んだ学生時代から、若くして死別された社会学者の父君へと立ち還る講座は、今年度をもって学校現場を去られる北村先生のライフヒストリーを語り直す機会とも重なっていた様に感じます。私も18回参加した最終回に、自身の家族体験を語り直す機会を頂くことができました。講座は教育・憲法・民主主義崩壊の危機を乗り越え、この時代を生き延びていく上で欠くことのできない「支えとするストーリー」（ジーン・クランディニン）を確かめる、得難い機会となりました。学び続ける教師たる北村先生が拓いた道に続く者として、確かな足取りで歩んでいきたいと想いを新たにしています。

笹木陽一（ささきよういち）
札幌市立中学校拠点校指導教員（初任者担当）、こどもの姿を語る会・事務局、臨床教育学会・札幌音楽教育サークル会員

寄稿

井上芳保著『犠牲になる少女たち――子宮頸がんワクチン接種被害の闇を追う』を読み、ワクチン行政の闇を考える

荻原 敏子（ワクチントーク北海道代表）

今、子どもたちが危ない！ワクチン漬けのために。乳児は13回、1才までに初回6回、就学までの日本脳炎ワクチン3回、MR（麻疹、風疹）の追加接種を加えると定期接種だけで23回、任意接種まで加えると7歳までに計40回。こんなに打たれています。医師主導で同時接種が勧められています。乳幼児の突然死も後を絶ちません。毎月一人は亡くなっている計算です。

「ワクチンで防げるものはワクチンで防げ」と国が推進するワクチン戦略は何を狙っているのでしょうか。製薬会社、医師会、厚労省等々の癒着が見え隠れします。

媒介する蚊もいず、病気のない北海道には不要な日本脳炎ワクチン、母子感染は100％防げているのに1歳未満に打つB型肝炎ワクチンなどまで定期接種に入りました。「子宮頸がんを予防できる」というふれこみのいわゆる「子宮頸がんワクチン」、正確にはHPVワクチンは、2010年に事業接種から接種が始まりました。この時期から被害者は出ています。2013年4月から定期接種になり、二か月間、原則12～16歳の全女性に接種されました。激しい頭痛、不随意の痙攣、記憶障害などの重篤な副反応被害者が出て厚労省は6月14日に積極的勧奨の中止を判断。今日に至っています。にもかかわらず、医学系の諸学会は定期接種の再開を求めています。

今のワクチン行政はいったいどうなっているのか、なぜこんなにおかしくなったのか。そんな疑問に答えてくれるのが、井上芳保著

『犠牲になる少女たち―子宮頸がんワクチン接種被害の闇を追う』（2017年、現代書館）定価2，200円＋税

『犠牲になる少女たち』です。重篤な副反応に苦しむ道内在住被害者の母親二名の講演記録から始まり、このワクチンの医学的に見た問題点、米国シンクタンクCSISの干渉などワクチン行政の闇という政治的背景、マスコミや学会の専門家たちの加担の構造、学校での性教育の不足、私たち自身の予防幻想などにまで踏み込んでいろいろな視点から論じています。

正確な情報もないまま、娘にこのワクチンを打たせて重篤な被害が出てしまい、「娘をもとの身体に戻して欲しい」と切実に訴える母の声。どんなに悔しいことでしょう。第二章からは被害者自身の葛藤、心身の体調の痛み、辛さなどが伝わってきます。症状を訴えても医師から詐病扱いされ、誹謗、中傷されたという酷過ぎる事実もあります。

希望を捨てずに立ち上がり、勇気をふり絞って訴訟へと歩を進めた被害者たちの選択には拍手を送りたい。北海道でも「被害者を支援する会」が立ち上がりました。

このワクチン、2016年度に全国でいまだに2500人も接種され、副反応は4・8％に発生。北海道も12月末調査では接種件数110人で副反応報告も2件ありました。積極的勧奨が中止されても接種自体を全面停止しない限り、副反応被害者は後を絶ちません。

今全国で125人が訴訟を起こしていますが、製薬会社や国は副作用と認めようとしていません。全国疫学調査では因果関係はないとして「接種歴がなくても、接種後に報告されている症状と同様な「多様な症状」を有する者が一定数存在した」「打っても打たなくてもみられる思春期特有の症状である」との結論に導こうとしています。本当なのでしょうか。

副反応がなぜ起きるのか。第三章で医師の詳しい説明があります。「子宮頸がんワクチン」という名前がすでにウソなのです。このワクチンの効果は特定の型のヒトパピローマウィルスの傷口からの侵入を食い止めるだけです。そのために身体の自然な免疫反応をわざと乱しています。またこのワクチンは蛾や酵母の遺伝子を使った組み換え商品で、まだ安全性が検証されていないのです。アジュバンド（免疫増強剤）に含まれるアルミニウム成分が脳にダメージを与えています。長く設計された抗体持続期間のために神経系統の副反応は1～2年後に発症することもあります。

第四章と第五章では、厚労省内の対米従属の実態、海外の製薬会社とWHOの関係、医師たちの利権構造、疫学調査の集計の問題点など驚くべき事実も明らかになります。第六章では当時の中学校保健室の様子やスピリチュアルに惹かれる女性たちのよく読む「子宮委員長はる」の著作まで検討しています。著者は多くのことをよく調べています。若い女性やお母さんたちのみならず、万人がこの本を読んで製薬会社の主張のウソを見抜き、本当のことを知って欲しい。そして子宮頸がんワクチン接種被害者の闘いをぜひ応援して欲しいと思います。

＊ワクチントーク北海道は、2015年7月「子宮頸がんワクチン定期接種中止と被害者救済」を求める3万8千筆以上の署名を、「北海道では日本脳炎の予防接種の区域指定を継続し、定期接種化しないこと」を求める3万7千筆以上の署名と合わせて道知事に提出。2017年9月7日には同じく道知事宛てに「日本脳炎ワクチン定期接種を中止し、区域指定に戻すことの検討と受ける側の選択権を求める要望書」「子宮頸がんワクチン定期接種中止と被害者救済を求める要望書」を提出。

（ワクチントーク北海道に連絡をとりたい方はこちらへ（荻原）　携帯：090-1385-0064 email:tosiko@cg8.so-net.ne.jp）

荻原 敏子（おぎわら としこ）
元札幌市内公立学校養護教諭。2014年、日本脳炎ワクチン定期接種化を契機にワクチントーク北海道＊を立ち上げる。昨年は道内10か所でワクチン問題を講演し、若いママたち、パパたちにワクチンは本当に必要か考えてもらい、受ける側の選択権についても伝えている。

図書室喫茶
YWCA Café
カフェボランティア 募集中！
札幌 YWCA 011-728-8111
中央区南22条西15丁目
サニークレスト札幌1F
「電車事業所前」徒歩2分
TEL&FAX 011-533-8123
電車事業所前
伏見小グランド
中央図書館前

内科・神経内科
札幌中央
ファミリークリニック
外来一般診療
月火木金9:00～12:00
札幌市中央区南1条西11丁目
海晃南一条ビル6F
TEL. 272-3455

ひがしさんの ボロボロ日記

東　龍夫

第９５回

by 飛郎

環境ホルモン２０１７

『ダイオキシン・環境ホルモン国民会議』（ＪＥＰＡ）という市民団体があります。設立当初から会員になっていて、年数回メールでニュースレターが送られて来ます。ネオニコチノイド農薬の神経毒性や発達障がいと合成化学物質の因果関係など、合成化学物質が生態系や人に与える影響について、その問題点を指摘続けています。最近送られて来た「ＪＥＰＡニュース１０６号」に『「空騒ぎ」ではなかった環境ホルモン２０１７最近事情―精子数減少はもはや負のスパイラル』という衝撃的な報告が掲載されていました。

いまから25年前の１９９２年、イギリスＢＢＣは「過去50年間で精子数が半減」というショッキングなニュースを流しました。日本でもＮＨＫが「メス化する自然」をテーマに、環境ホルモン問題を大きく取り上げました。その後、その問題を巡って喧々諤々の議論が日本国内でも続きましたが、研究に余り予算がつかなかったこともあり、次第に忘れ去られて行きました。一方、欧米では継続的な研究が行われ、最近注目すべき研究結果が発表されました。

ひとつは、「生殖問題に関する医学専門雑誌（Human Reproduction）に発表された、精子数減少に関する過去の研究の総合的レビュー。この論文は、１９８１年から２０１３年までの約30年間に発表された精子数に関する１８５研究のメタ解析で、膨大な研究結果を再評価したものです。このとしの7月にはアメリカのＣＮＮニュースがこの研究をとりあげ、「欧米男性の精子数40年間に50％以上減少」と報じました。

精子に関するもう一つの重要な論文は、ワシントン州立大学のHoranらによる研究で、２０１７年PLoS Genに発表されたものです。マウスを使った実験で、「環境ホルモンに暴露させた親から生まれた子どもは、親よりさらに精子数が減少し、その孫はその子よりよりさらに減少する」という結果だったそうです。この報告の表題にもある、「精子数はもはや負のスパイラル」という衝撃的なタイトルにつながりました。

「ダイオキシン」や「環境ホルモン」という言葉は、日本では現在ほとんど聞かれなくなりました。しかし、その問題が解決されたわけではありません。ゴミは焼却し続けているし、合成洗剤や農薬は使い続けられ、わたしたちの周りにはプラスチック製品が溢れています。合成化学物質については、「香害」と化学物質過敏症の問題が最近マスコミでも注目されています。「ゴミゼロを目指し焼却は止める」「合成洗剤は止めてせっけんにする」「農薬は極力使わない」「食品に触れるプラスチック製品はなるべく避ける」など、改めて溢れる合成化学物質を少しでも減らすことが求められています。

＊環境ホルモン＝ある種の合成化学物質は生物のホルモンと非常に似た化学組成をしていて、体内に入るとホルモンと似た作用を及ぼし生殖機能などを阻害する。プラスチックの可塑剤であるフタル酸エステルなどが環境ホルモンとして疑われている。

東龍夫（ひがしたつお）
１９５２年生まれ。再生資源回収業。大量消費社会から持続可能な循環型社会を目指して活動中。札幌市環境保全アドバイザー、北海道環境学習トレーナーを務める。

フィールドワークな日々

宮内泰介の

第七一回　地域の持続性をきめるもの

ずっとおつきあいしている宮城県石巻市の北上地区（旧北上町）。東日本大震災の大きな被害を受けたこの地区も、集団高台移転がほぼ完了を迎えつつある。震災から六年半。長かった復興の道のりが、とりあえず一段落だ。

そこであらためて、各集落の状況について、話を聞いて回った（今年八月）。ある集団移転地は、元の集落からぐんと人口が減って、少数精鋭の再スタートに。そこに、隣の集落で残った世帯数軒ほどが合流して、新たな自治会を成立させた。しかし、本格的な自治会活動はこれから、という。別のある集団移転地は、近隣の二つの集落から合流してできた。自治会は発足したが、自治会活動はやはりこれからのようだ。お祭りを一緒にやるのかどうかなど、まだまだ不透明なところが多い。

そんな中、小室（こむろ）集落の話が印象深い。小室集落は、集団移転の「優等生」で、早くから自主的に移転地を決め、地権者との交渉も自分たちで行った集落だ。その結果、国の防災集団移転促進事業について、県内最初の「大臣承認」を得た。それが震災の翌年二〇一二年三月。そのあと、国や自治体の手続きが大幅に遅れ、住民たちはやきもきしたが、結局、二〇一五年に高台移転が完成。被災地全体の中でもかなり早いほうだった。参加率も高い。

実のところ、集団移転に参加して地元に残る人の割合は、地域によってずいぶん違う。あらためて計算してみると、同じ北上地区でも、ある集落は結局一〇％以下の残存率（これでは集団移転はできないので、近隣の集落と合流して移転することになる）、ある集落は九〇％の世帯が参加、と大きな開きがある。小室はかなり高い方で八〇％の残存率。その理由はどこにあるのか。

区長の佐藤林穣（しげあき）さんは（七四歳、漁業）はこう言う。

「ここはね、けっこう漁業後継者がいるのです」。なぜでしょうか、と聞くと、「ここは漁業でも共同作業をするんです。たとえばよその家で仕事が遅れていると、手伝ったりね。小さな船を引き揚げるときはお互い手伝うという習慣もあります。情報交換しあったり、いいところを真似しあったりして、それで漁業の実績がよいのです。

後継者が漁業を継いでいくときに、そういうことは大きいのです。定置網などはひとりでできないですからね。そういうまとまりがいいのが、集団移転のときのまとまりにもなったし、後継者が大きいことにもつながっていると思います」

たしかに小室集落の団結力の強さは、復興初期に私たちが集団移転のお手伝いをしていたときも目立っていた。そこにはこういう背景があったのか。

地域の「強さ」とか持続性とかいったものをどう測ればよいか、はなかなか難しい。しかし、集団高台移転に成功した小室集落の例は、示唆するものが大きい、と思う。

宮内 泰介（みやうち たいすけ）
1961年生まれ。さっぽろ自由学校「遊」共同代表。北海道大学教員（環境社会学）。ソロモン諸島、北海道、宮城などで、環境、生活の調査中。

自然食ホロ
札幌市東区中沼西
5条2丁目3－16
TEL：887-6224
いつも喜んで、感謝して。
http://holo.sunnyday.jp/

さまざまに俳句

～五・七・五の言葉の出会い～

第14回

世界最短の定型詩と言われる俳句。五・七・五で作られる世界。日常、見たり聞いたり感じたことを、忙しい日々に忘れてしまうその一瞬を、十七文字に込めてみました。

湯に浮かぶひとひらの葉に秋便り

アポイ岳の麓の温泉に行ってきた。キラキラしている海を見ているとまだ夏が続いているような気がするけれど、アポイの山々は黄色く色づき、確実に秋に変わっている。露天風呂から見える雄大な山、青い空。ぬるめのお湯に浸かっていると、一枚の葉がお湯に浮かんでいた。黄色い葉っぱ。夏が大好きだから、いつまでも夏気分でいたい私に、秋が来ていることを知らせるお便りのように、静かに私の前に現れ、ゆらゆらとお湯の上に浮かんでいた。

柚原誓子（ゆはらせいこ）
平日は会社員。休日は心惹かれるままに、趣味のスキー、温泉、旅行を楽しんでいます。数年前から始めた俳句。あらためて日本語の美しさに触れています。

ベランダでとんぼもひらり一休み

休日の昼下がり。何かに追われることなく、ゆったりと時間を過ごす。窓の外にはとんぼが飛んでいる。もう、とんぼの季節になったんだ、秋だなあ。とんぼを久しぶりに見たような気がする。きっと飛んでいるのだろうけど、見る余裕がないのだろうか。窓の外をゆっくりと眺めることなく日々あわただしく過ごしている自分に改めて気づく。ベランダに止まったとんぼの写真を撮ろうと、携帯片手に近づく。飛び立つことなく、とんぼもそのままじっと動かない。温かく気持ちよいのか、秋の日差しを浴びながら、とんぼも一休み。

Simple Life, High Thinking
小５から高３まで
スコーレ ユウ
NPO法人 森の学校ユウ
〒007-0866　札幌市東区伏古６条４丁目4-21
TEL. 785-0228
東苗穂校　東区東苗穂８条２丁目13　TEL. 791-5770

北海道平和運動フォーラム
代表　江本　秀春
代表　清末　愛砂
代表　長田　秀樹
札幌市中央区北４条西 12 丁目
TEL.011-231-4157
FAX.011-261-2759
http://peace-forum.org/

事務局だより

衆議院選挙が終わりました。

昨年の5区補選から、市民と立憲野党の共闘の取り組みが広がり、「市民の風 北海道」が立ち上がって、「遊」でも選挙が話題になることが多くなっていました。「遊」の会員で各区の市民の会で活動された方も多く、この1ヶ月は怒涛の日々でした。

選挙戦中、「与党はこれまでも共闘していた。共闘して候補を一本化した与党と複数の野党候補が闘うという構図を脱して、初めて与野党一騎打ちの戦いに臨めた」という言葉を何度か聞きました。前回衆院選の頃の「遊」の講座で、戦略的な投票行動の必要性という話がありましたが、一本化できていたら勝てていたという選挙区が三つはあったと思います。3割の得票で7割近い議席を取る小選挙区制の問題点はこれまでも指摘されていましたが、制度を改革する可能性もまずは現行制度の中で戦い取っていくしかないんですよね。

それにしても、小池・前原ショックによる候補予定者の迷走にもかかわらず、共闘の原則を堅持してすぐに協定調印、候補者とともに闘った共産党には感激しました。志位さんが本気の共闘と言っていましたが、本気を実感する日々でした。

それに対して、比例区の共産党議席を守れなかった無念さを多くの人が口にしていました。畠山さんは赤ちゃんを抱いて「遊」の講座に来てくださったこともあり、ひそかに応援していたので本当に残念です。比例区は野党統一名簿で闘おうという提案もあるようですが、具体的な論議が深まるといいなと思っています。（細谷 洋子）

編集後記

「アイヌを忘れないで」と戸塚美波子さんが道新に投稿したのが「100年」の時。それから50年、原田さんと八幡さんに書いていただいた。ではこの50年、この国はどうだったのだろうと思わざるを得ない。（く）

気づけば今年度も上半期が終了し、後期に突入。そんな中、手の回っていなかった「ゆうひろば」の特集は（く）さんに丸投げ…。10月号ですが月末ギリギリの発送です。（こ）

さっぽろ自由学校「遊」 からのお知らせ

子どもの貧困を考える 3 ー実践編
番外編のお知らせ

「札幌市の貧困対策計画を考える ～みんなでパブコメの声を上げよう！」

いよいよ札幌市の計画案が大詰めです。みんなで学び、声をあげましょう！

■日　時　2018 年 1 月 11 日（木）　18:45 ～ 20:45
■会　場　さっぽろ自由学校「遊」（愛生舘ビル５Ｆ　501）
■参加費　一般・会員 800 円　ユース 500 円

★講座の日程変更・パンフ表記の訂正のお知らせ★

後期開講講座の一部につき、講座案内の表記と日程が変更になっています。表記ミスの修正と共にお知らせいたしますので、ご参加の際はお間違えのないようよろしくお願いいたします。

＜日程変更＞

英語で読まないとわからない！少数先住民族アイヌの人権
　第 6 回（変更前）11 月 18 日（土）→**（変更後）12 月 16 日（土）**

スウェーデンから学ぶ「サステナビリティ（持続可能な発展）」の意味
　第 2 回　（変更前）11 月 7 日（火）→**（変更後）11 月 14 日（火）**
　第 6 回　（変更前）3 月 6 日（火）→**（変更後）3 月 13 日（火）**

＜講座案内（パンフレット）表記の訂正＞

11 Ｐ　日本の教育はどこへゆく？
　（誤）月 1 回木曜→（正）月 1 回火曜

21 Ｐ　「遊」版うたごえ喫茶 2017
　（誤）10 月 28 日（水）より→（正）10 月 28 日（土）より

東ティモール
マウベシ珈琲
オーガニックカフェやショップで販売中
フェアトレードの美味しいコーヒー！！
NPO 法人 ほっかいどうピーストレード
TEL 070-5619-3222
hokkaidopeacetrade@gmail.com

いつだって No Nuke！

北海道のエネルギーの未来を考える
10,000 人の会

ゆうひろば
発行：NPO 法人さっぽろ自由学校「遊」
〒 060-0061　札幌市中央区南 1 条西 5 丁目　愛生舘ビル 5 F 501
・郵便振替口座：　02780-5-47036（名義：自由学校「遊」）
・TEL:011-252-6752
・FAX:011-252-6751
・syu@sapporoyu.org
・http://www.sapporoyu.org

二次元コード読取機能付の携帯電話でこのコードを読み取ると、カレンダー情報のページにアクセスできます。携帯電話用のＵＲＬを直接入力しても同様です。
http://sapporoyu.org/m/